博士論文（要約）

論文題目　　ジョルジュ・バタイユにおける行動の論理と文学

氏名　　石川　学

目次

序論 1

第一章　武器としての論理 7

I. 「逆転」への序章：『ドキュマン』誌時代の反観念主義 8
II. 『社会批評』誌の時代 1：「ヘーゲル弁証法の基礎の批判」 24
III. 『社会批評』誌の時代 2：全体主義と対決するための理論構築の試み 34
IV. 「コントル＝アタック」と「超＝ファシズム」 47
V. 空間から時間へ：雑誌『アセファル』におけるファシズム論の新展開 55
VI. 「社会学研究会」の活動 1：社会学の歴史的意味 64
VII. 「社会学研究会」の活動 2：「悲劇の帝国」の建設に向けて 78

第二章　防具としての論理 93

I. 戦争と神経症：第二次世界大戦後の思索へのイントロダクション 94
II. 精神分析学への不満 104
III. 社会学から無神学へ 116
IV. 哲学から科学へ：実存主義と経済学 131
V. 世界戦争と自己意識：全般経済学の実践 147

第三章　文学と無力への意志 175

I. 経験の語りと詩 1：ふたつの供犠をめぐって 176
II. 経験の語りと詩 2：それぞれの無力に向けて 194
III. 文学と無神学：その歴史的意味 207
IV. 権利の不在から死の権利へ 224

結論 247

書誌一覧 253

序論

1.　主題の導入

本論文は、ジョルジュ・バタイユ（Georges Bataille）（1897-1962 年）の思想における、「行動」の論理化の様態と、「文学」の意義づけの様態を、相互の連関を射程に入れつつ、明らかにすることを目的とする。

バタイユにおける行動の主題を考えるとき、この作家が実際に主導した政治・社会的実践の重要性を、考慮に入れないわけにはいかない。対立関係にあったアンドレ・ブルトンと和解して立ち上げた政治組織「コントル＝アタック」（1935-1936 年）での、反資本主義・反ファシズムの運動や、ファシストたちの「軍隊の帝国」に対抗する、「悲劇の帝国」による権力奪取を訴えかけた、「社会学研究会」（1937-1939 年）での言論活動などが、念頭に浮かんでくる。これらの実践はいずれも、ブルジョワジーとファシストたちという、既存の支配的権力を打倒し、政治・社会秩序の刷新を実現する目論見と結ばれていた。そのなかでは、そうした打倒のための現実行動へと、ひとを心底から促すような、情動の解放の必要性が強く主張された。民衆の持つ、「情動の昂揚と熱狂」に対する渇望に応えるという、ファシズムの「武器」の応用をしきりに主張し[1]、「規律のとれた民兵たちの自由な上昇運動」を称揚するようなバタイユの姿勢は[2]、シュルレアリストたちから、「純粋にファシスト的」という意味での「超＝ファシスト」との非難を蒙り[3]、「コントル＝アタック」を瓦解へと導く。「悲劇の帝国は、陰鬱で意気消沈した世界の所業ではありません。［…］帝国は、死を愛するほどに、噴出的な生を送る者たちに属することになるでしょう」、などといった言辞は、「社会学研究会」の名に反する非科学的な態度だとして、最も近しい同志たちの離反を招く[4]。このように、バタイユによる行動の主張は、非理性的な情動や力の賛美と結びつくものであり、既成権力の打倒という行動の目的に収まらない、その危うさが、結果として、行動の求心力を弱めたことは否定できないのである。

だが、その一方で、看過できないのは、バタイユが上記のような行動の主張の妥当性を、一貫して、学知（科学と哲学）を用いて論理化することに拘泥している事実である。そもそも、こうした拘りは、政治・社会的実践の枠組みを越えて、第二次世界大戦以前のバタイユの思想

---

[1] « “Contre-Attaque” Union de lutte des intellectuels révolutionnaires », *Œuvres complètes*, t. I, Paris, Gallimard, 1970, p. 382 : « […] nous entendons à notre tour nous servir des armes créées par le fascisme, qui a su utiliser l’aspiration fondamentale des hommes à l’exaltation affective et au fanatisme ».

[2] Georges Bataille, « Enquête sur les milices. La prise du pouvoir et les partis », in Jean-Pierre Le Bouler, « Du temps de *Contre-Attaque*. L’enquête sur les milices (un inédit de Georges Bataille), in *Cahiers Georges Bataille*, n° 1, dir. par Dominique Lecoq, Paris, Association des amis de Georges Bataille, 1991, p. 131 : « *Que peuvent faire les partisans de l’offensive sinon se rallier à un mouvement libre et ascendant des milices disciplinées ?* » 強調はバタイユによる。

[3] « La note adressée par les surréalistes à la presse », in Georges Bataille, « Notes », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 672-673 : « des tendances dites “sur-fascistes”, dont le caractère purement fasciste s’est montré de plus en plus flagrant ».

[4] Cf. Michel Leiris, « Lettre à Georges Bataille (le 3 juilllet 1939) », in Denis Hollier (éd.), *Le collège de sociologie*, Paris, Gallimard, « Folio », 1995, p. 819-821 ; Georges Bataille, « Lettre à Roger Caillois (le 20 juillet 1939) », in Denis Hollier (éd.), *Le collège de sociologie*, *op. cit.*, p. 833-839.

活動を、根底から規定しているものだ。美醜の価値ヒエラルキーの逆転を、醜悪な動物から均整の取れた形態の動物の派生という、「古生物学者たちが承認している」とされる事象への依拠によって必然化しようとした、『ドキュマン』（1929-1931 年）時代の論考「アカデミックな馬」（1929 年）を起点として[5]、論理の筋道は洗練されていく。「抽象概念ではなく、心理学的ないし社会学的事実に直接立脚した」フロイトの精神分析学と[6]、いったんは棄却したヘーゲル哲学への参照によって、「低い唯物論（le bas matérialisme）」が組み立てられ、観念的価値の支配下で貶められている、存在の物質性を肯定する運動に、抑圧された生を解放する契機が割り当てられる[7]。そして、このふたつの学は、レヴィ=ブリュルやデュルケム、モースらのフランス社会学と合わせて、「異質学（hétérologie）」を錬成するのに不可欠なものとして応用される。「人間の生の解放を追い求め続ける、深い転覆の動き」である[8]、反ファシズムの行動を成功に導く鍵となるのは、そうした「異質学」の実践を通じて、「牽引と反発の社会的運動に関する認識の体系」を築き上げることだと主張されるのである[9]。雑誌「アセファル」（1936-1939 年）の論考では、ナチ・ドイツによるニーチェ思想の横領を指弾するべく、レヴィナスをはじめとした哲学の成果が幅広く動員され[10]、その成果を踏まえつつ、ニーチェ的な時間観の共有に基づく「悲劇」の実践へとファシストたちを誘うような、集団行動の可能性が探索される[11]。そして、「社会学研究会」では、ファシズム権力に取って代わる権力を行使するべき、聖性の共同体（「悲劇の帝国」）の方法論が、社会学を筆頭に、精神分析学、また、コジェーヴの影響下で再解釈された、ヘーゲル哲学に求められていくのである[12]。

以上に概観したような、学知に立脚した行動へのアプローチにおいては、既成の秩序を覆す行動へとひとを促す情動の発現を、歴史的必然として示す論理の彫琢が、それぞれの見地から行われている。いわば、武器としての論理の精錬である。そのなかでの学知の用いられ方は、取って付けたようなものではない。なすべき行動の必然性を、学知によって示し出すことで、そうした必然性の認識を集団で共有し、進んで行動に身を投じることが可能になる。この点にこそ、行動が現実の力を構成するアスペクトが存しているのであり、その力が大きくなるほどに、既存の社会に加え、既存の実存を変革する道が開かれるのである。論理化を通した認識の共有、すなわち、「承認」の拡大が[13]、変革に向けた行動が成就する鍵なのである。したがって、

---

[5] Georges Bataille, « Le cheval académique », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 162 : « Et il importe d'observer à ce sujet que les paléontologues admettent que le cheval actuel dérive de lourds pachydermes, dérivation qui peut être rapprochée de celle de l'homme par rapport au hideux singe anthropomorphe ».

[6] Georges Bataille, « Matérialisme », O. C., t. I, *op. cit.*, p.179-180 : « Le matérialisme sera regardé comme un idéalisme gâteux dans la mesure où il ne sera pas fondé immédiatement sur les faits psychologiques ou sociaux […]. Ainsi c'est à Freud, entre autres, […] qu'il faut emprunter une représentation de la matière ».

[7] Cf. Georges Bataille, « Le bas matérialisme et la gnose », art. cit., p. 220-226.

[8] Georges Bataille, « La structure psychologique du fascisme », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 371 : « la profonde subversion qui continue à poursuivre l'émancipation des vies humaines ».

[9] *Ibid.* : « […] un système de connaissances portant sur les mouvements sociaux d'attraction et de répulsion se présente de la façon la plus dépouillée comme une arme ».

[10] Cf. Georges Bataille, « Nietzsche et les fascistes », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 447-465.

[11] Cf. Georges Bataille, « Chronique niezschéenne », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 477-490.

[12] Cf. Georges Bataille, « Attraction et répulsion. II. La structure sociale », in Denis Hollier (éd.), *Le collège de sociologie*, *op. cit.*, p. 144-168.

[13] ヘーゲル哲学に依拠したこの観念の詳細については、本論文第一章第VI節および第VII節で検討する。

情動に基づく行動の実践を、そのための論理の練り上げとの本質的な結びつきにおいて捉えることが、学知から行動を目指すバタイユの思想本質の理解にとって、欠かせない営為なのである。

続けて、第二次世界大戦以降のバタイユにおける、行動への思索に目を向けてみることにしよう。「悲劇の帝国」の目論見が、「軍隊の帝国」の侵攻に、いささかの現実力を行使することもなく解体した事実は、武器としての行動の論理を失効させずにはいない。一見すると、行動の主題は、思想の前面からは引き下がる。その代わりに、「内的経験」という、「ひとが通常神秘的経験と呼ぶ、脱自と法悦［…］の状態」の方法的探求が[14]、実存の変革に向けた内面的な試みとして、「無神学（athéologie）」の名のもとにまとまった思索を形作り、戦後バタイユの知的実践の一翼を作りなしてゆく。重要なことは、このような思索の流れとともに、戦前において行動の必然性を論理化するのに用いられた、精神分析学、社会学、また、ヘーゲル哲学を除く現象学に対する、根本的な距離が示されることである。バタイユにおける学知への観点は、まさしく、行動への観点と、直接に相関しているのである。これらの諸学が相対化されるなかで、行動の論理を作りなす学として、ただひとつ、非常な重要性を付して提起されるのが、かつての論文「消費の観念」（1933 年）に端緒が示されながらも、戦前には形を取ることのなかった、「全般経済学（économie générale）」である。『呪われた部分』（1949 年）を最大の成果とするこの学が果たそうとするのは、米ソの破局的世界戦争の勃発が現実味を帯びるなかで、バタイユがその起因と解析するところの、エネルギーの膨大な蓄積を、戦争によらずして解消するための、いわば、防具をなす行動の論理の精錬である。この論理が不可欠なものとして要請する、アメリカによる富の全世界的贈与という行動に、世界規模での社会と実存の変革の、平和裡に果たされる最後の可能性が託されるのである。

戦後バタイユの思想を読み解くうえで、さらに興味深いのは、行動の論理の、以上のような、武器から防具への役割の変遷と平行して、文学の主題の重要性が拡大していくことである。「詩のたいへんな不能ぶり」、「隷属した高貴さ、間抜けな観念主義」を論難した姿勢に顕著なように[15]、戦前のバタイユは、現実から乖離した文学を批判し、わずかな例外を除いて、正面から考察することはなかった。だが、戦後のバタイユにとって、文学は、「主体の内奥性」を直接的に感得する「好運」を担った言語実践であり[16]、内的経験の方法的探求をなす、無神学の企図と結びつく仕方で、積極的に論じられていく。この主題の拡大は、一面で、行動を手段とした社会と実存の変革に対する、バタイユの希望の揺らぎを浮かび上がらせるもののようにも思われる。とはいえ、文学は実際には、行動が織りなす歴史の現代に、「深い無関心を、非歴史的な

---

[14] Georges Bataille, *L'expérience intérieure* (1943, 1954), O. C., t. V, 1973, p. 15 : « J'entends par *expérience intérieure* ce que d'habitude on nomme *expérience mystique* : les états d'extase, de ravissement […] ». 強調はバタイユによる。

[15] Georges Bataille, « Le "Jeu lugubre" », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 212, 214 : « grande impuissance poétique » ; « cette noblesse servile, cet idéalisme idiot ».

[16] Georges Bataille, « De l'existentialisme au primat de l'économie », O. C., t. XI, 1988, p. 306. 強調はバタイユによる。

判断の『無感動』を導入する」ための、無類の手立てをなすものだ[17]。それは、現実世界の行動が、防具としての論理の実現にではなく、破局的戦争の実現に突き進んでいるかに見える歴史状況の只中で、行動とは無縁な意識をひとに開示するのであり、行動の歴史に、その欠落を穿つのである。したがって、文学は、行動の欠落として、行動に対して意味を持つのであり、さらに言えば、防具としての論理が実現する先にバタイユが見据える、行動の終焉における人間の意識を予告するものでさえある。行動の権利を前にして、「文学は自らの有罪を認めなければならなかった」のだが[18]、欠落が有罪性という積極的な意味に置き換わることで、文学は行動に、おのれが断罪しているものの意味を直視させるのである。

バタイユにおける行動の問題は、たんに行動の問題ではなく、学知から行動への移行の問題である。そして、バタイユにおける文学の問題は、たんに文学の問題ではなく、学知と結ばれた行動の、背面をなす問題である。バタイユは、社会学研究会時代の論考「魔法使いの弟子」（1938 年）のなかで、人間の実存が、「科学の人間（L'homme de la science）」、「虚構の人間（l'homme de la fiction）」、「行動の人間（L'homme de l'action）」という三通りのあり方に分離している現代世界の状況を批判し、実存の「全体性（totalité）」を回復する必要性を強く語っていた[19]。こうしたバタイユの希求は、「内的経験」、また、「主体の内奥性」をめぐる思索のうちに、綿々と引き継がれていく。行動の論理と文学の主題とをひとつなぎに検証することは、まさに、実存の「全体性」の回復をめぐる、バタイユの長き思索の全般に、軸を通すということなのである。そして、こうした課題をなすのが、本論文の目論見である。

2. 論文の構成

本論文は三章構成である。

第一章「武器としての論理」では、第二次世界大戦以前のバタイユによる、行動の論理の、学知を用いた練り上げの様態に光を当てることを試みる。はじめに、『ドキュマン』誌を舞台にバタイユが展開する反観念主義と、観念主義への対抗として提起される「低い唯物論」における、高低の価値逆転の論理化を、自然科学的な世界認識と、独自の仕方で理解されたヘーゲル哲学との連繋に着目しながら検討する。続いて、『社会批評』誌（1931-1934 年）に上梓された論考「ヘーゲル弁証法の基礎の批判」（1932 年）に示される、ニコライ・ハルトマンのヘーゲル解釈と精神分析学とを接合させる理路を検証し、労働者革命に際しての「力」の行使を必然として提起しようとする、バタイユの論理を明るみに出す。そののち、同じく『社会批評』誌に上梓された後続の論考「ファシズムの心理構造」（1933-1934 年）を分析し、民衆の情動を反ファシズムの行動に向かわせる方法の科学的探求である、「異質学」の具体的内実を精査する。

---

[17] Georges Bataille, *L'histoire de l'érotisme*, O. C., t. VIII, 1976, p. 163 : « […] l'indifférence profonde, l'"apathie" d'un jugement anhistorique ».

[18] Georges Bataille, *La littérature et le mal*, O. C., t. IX, 1979, p. 172 : « Devant la nécessité de l'*action*, s'impose l'honnêteté de Kafka, qui ne s'accordait aucun droit. […] A la fin la littérature se devait de plaider coupable ». 強調はバタイユによる。

[19] Cf. Georges Bataille, « L'apprenti sorcier », in Denis Hollier (éd.), *Le collège de sociologie*, *op. cit.*, p. 313-315.

政治組織『コントル＝アタック』におけるシュルレアリストたちとの協同が、時をおかずに瓦解する経緯を追い、彼らの眼に「超＝ファシスト」と映った要素と一体的に存在する、行動の前提をなす知的理解へのバタイユの拘泥を明示する。ファシズムによるニーチェ思想の横領を批判し、その正確な読解を対峙させる意図から紡ぎ出される、ファシズム権力の源泉に対する新たな理解と、それに基づき提起される、ファシズム打倒に向けた新たな行動の方法論を、『アセファル』誌を舞台に、俎上に載せる。「社会学研究会」時代の、ニーチェ思想とヘーゲル哲学の結合の試みを、コジェーヴのヘーゲル解釈からの影響を考慮しながら検証し、「承認」をめぐる行動の論理が提起される経緯を明らかにしたのち、そうした論理と聖社会学の知見の連合を通して、ファシズム権力を覆す「悲劇の帝国」の建設が主張される理路を追う。

第二章「防具としての論理」では、第二次世界大戦を経たバタイユの問題意識の変化と、それに伴う、学知と行動の連繋に関する思索の変遷を考察する。まず、章全体の導入として、『ニーチェについて』(1945 年) のなかの、バタイユ個人の神経症経験についての記述に着目する。それを起点に、生じたカタストロフィーの意志的な引き受け、また、新たなるカタストロフィーの回避という、戦後バタイユを特徴づける問題意識の存在を析出する。以上を踏まえ、バタイユが確言するに至った、存在変革を目指す科学としての精神分析学の不十分さを、いっそうの重要性を付加されていく、ヘーゲル哲学との比較を手段に、行動への寄与という論点を視野に入れつつ、浮かび上がらせる。さらに、聖性の共同体の方法論と不可分に結ばれたものである、社会学の意義が相対化され、「内的経験」の方法を考究する「無神学」にその地位を代わられることを明示し、そうした推移と、戦後バタイユの基本的認識である、「神話の不在」の認識との関わりを探る。内的経験のなかで垣間見られる「主体の内奥性」に、言語を通じて肉薄するための手段としての、哲学に比した科学の優位が帰結される過程を検証し、かつ、ヘーゲル哲学が他の哲学一般とは別に、思想の基礎に位置づけられることを銘記する。最後に、『呪われた部分』(1949 年) における、経済学的視座に基づく歴史理解と、そこから結論される、なすべき行動の必然性を、ヘーゲル哲学との論理連繋を意識しつつ追い、そうした行動に付与される歴史的意味を総括する。

第三章「文学と無力への意志」では、バタイユが文学のいかなる側面に、行動との逆説的な繋合関係を見て取るのかを分析する。第一に、バタイユが文学を正面から論じた最初期の論考である、『内的経験』(1943 年) のプルースト論に着目し、内的経験＝「交流」を表象する可能性が、文学の持つ、「供犠」としての性格に見極められていく過程を、全体の考察の前段階として明らかにする。続いて、『内的経験』でのバタイユ自身による、「推論的言述 (discours)」を用いた経験の表象の展開に、プルーストの文学性＝「ポエジー」を進んで反映しようとする企図が読み取れることを論証したうえで、ポエジーを推論的言述と結びつける要素が、それぞれの「無力」に見出されるものであることを、後年のヘーゲル論「ヘーゲル、死と供犠」(1955 年) の記述を手がかりに導き出す。そして、推論的言述と行動との本質的一体性への注目から、文学と行動とのありうる繋合を展望する。そうした視座から、『ニーチェについて』で更新された、プルースト理解に目を遣り、プルーストの描く「無意志的回想」の経験が、神の不在との

合一という、無神学的経験と重ねられる経緯を検証し、そのような経験に付与される歴史的意味を浮かび上がらせる。文学の描き出す経験が持つ歴史性に対する認識が、文学と歴史＝行動の関係についての思索とじかに結びついていく理路を、『エロティシズムの歴史』（1950-1951年執筆。生前未公表）の読解を通して明らかにする。最後に、行動を前にした、文学の権利の不在、世界戦争に行き着きうる歴史を前にした、文学の権利の不在が、行動と歴史に対して行使しうる、自死の権利に置換され、もって、文学に現実世界への通路が開かれる過程を、『文学と悪』（1957年）を主な対象として考察する。

第一章　武器としての論理

第一章では、『ドキュマン』（1929-1931 年）から「社会学研究会」（1937-1939 年）までの時期を範囲として、バタイユが学知を応用しつつ、行動の論理をいかに精錬したかを明らかにすることを試みる。この時期のバタイユはつねに、現実的な支配力を持つ対象の、支配の妥当性を有効に論駁する理路を探索するなかで、自らの思索を彫琢していたと言うことができる。その対象は、シュルレアリスムの観念主義からブルジョワ資本主義、そしてファシズムへと中心を移していく。そのなかで、バタイユが一貫して拘泥しているのは、それらの支配を転覆する行動へとひとを駆り立てる心理が発現する必然性を、様々な学知を用いて証し立てることであった。学問的な知性の対極に位置するはずの、盲目的情動や力の行使の起こりを、学知を用いて論理的に必然化しようとする目論見が、既存の支配的価値や権力を、行動を通じて現実に転覆し、世界の様相と実存の様相を変革する希望に結ばれていたのである。そうした希望は、自らの作り上げた武器としての論理が、戦争を前にした無力によって、完全な沈黙へと追い込まれるときに、根本的再考を迫られることになるだろう。そこに至る過程を検証することが、本論文の最初の課題である。まずは、『ドキュマン』における、観念主義転覆の論理を探ることから論述をはじめよう。

第二章　防具としての論理

第二章では、第二次世界大戦の勃発と、翌年のフランスの降伏によって、「悲劇の帝国」による支配という希望が現実にいかなる意味も持たなくなって以降の、バタイユの学知をめぐる思索の変遷と、行動の論理の新たな練り上げの様態を浮かび上がらせることを課題とする。ドイツ軍占領下の北フランスにあって、1941 年のモーリス・ブランショとの出会いと、彼を中心的な参加者として開かれた「ソクラテス研究会」（1941 年秋から 1943 年 3 月。会の内容については後述）という幸福な例外に恵まれたものの、友人たちの共同体に外的な形式を与えることができずに終ったバタイユは、解放時の戦闘に際しては、強迫的な死の恐怖を経験する。四年超の戦争と占領のなかで直面された、共同体の不可能性の現実と、意識によって制御し得えない無意識の性質の自覚は、必然的に、聖社会学と精神分析学に対する観点に変化をもたらさずにはいないであろう。さらに、戦後のフランスを席巻する実存主義は、ヘーゲル哲学に対する持続的な関心と相俟った仕方で、個と普遍、内奥性と外的事物といった、新たな問題設定を明確化するための原動力をバタイユに与えるだろう。そして、以上のような学知をめぐる思索は、すでに生じた戦争の悲惨をいかにして引き受けるのか、また、次なる終末的な戦争をいかにして回避するか、という、行動に関わる倫理的な問いと結びついてあるだろう。本章は、こうした戦後の問題意識の進展に影響を与えたと思われる、ある戦争経験の思想的インパクトを検証することから始めたい。

第三章　文学と無力への意志

第三章では、第二次世界大戦後のバタイユが、全般経済学による行動の論理化と平行して巡らせた、文学をめぐる思索の様態を、全般経済学的な問題意識との本質的連関において考究することを試みる。『ドキュマン』時代のシュルレアリスム批判に際して、「詩のたいへんな不能ぶり」「隷属した高貴さ、間抜けな観念主義」を論難した姿勢に顕著なように[1]、戦前のバタイユは、現実から乖離した文学を一貫して批判し[2]、あるいは考察の俎上に載せずにきた。その虚構性が評価されるのはもっぱら、行動と直接に結びつく限りにおいて、ファシストをリーダーの殺害に誘うような演劇性を含み持ち、あるいは、「悲劇の帝国」の基礎をなす選択的共同体に生きた現実を与える、神話的機能を行使する場合であった。虚構はまさに、文学としてでなく、神話としてのみ意義を持ち得たのであり、大戦を経て得られた、「神話の不在」の認識は、そうした見解の根本的変更を避けがたいものとするだろう。虚構を現実に生きる可能性が失われてしまったあとに、科学的知見が蓋然的なものとして映し出すに至った、破局的戦争の未来を前にして、「不能＝無力（impuissant、impuissance）」な文学がなぜ、正当な検討対象となり得たのか。このことを明らかにするには、まず、バタイユ自身による「内的経験」の表象と、文学＝詩とが、どのような位相で結びつくのかを浮かび上がらせなくてはならない。実のところ、このふたつの結びつきには、文学の無力と行動の無力とが重なり合い、さらにはまた、文学の無力が無の力と重なり合う元となる地点が潜んでいる。これらの考察を成し遂げたとき、バタイユにおける文学の主題が、行動の主題との対比においてのみ、十全に理解される所以が明示されるだろう。こうした視座のもとに、まずは著作『内的経験』における、経験の表象をめぐるバタイユの意識に光を当てることとする。

---

[1] Cf. Georges Bataille, « Le “Jeu lugubre” », art. cit., p. 212, 214. 本論文第一章第 I 節註 5 で引用。

[2] 公刊されなかったシュルレアリスム批判のふたつの論考から、明確な事例を挙げておく。「ブルトン氏の乱雑な頭には、何ものも詩の形態においてしか入っていくことがないのは、遺憾と言うべきである。ブルトン氏の実存は、すべてが純粋に文学的であり、卑俗で陰鬱な、あるいは平板な出来事が彼の周りに引き起こす事柄から、顔を背けさせるのだ［…］」（Georges Bataille, « La “vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* » (1931 ?), O. C., t. II, *op. cit.*, p. 105 : « Il est regrettable, disons-nous, que rien ne puisse entrer dans la tête confuse de M. Breton sinon sous la forme poétique. Toute l’existence, *purement* littéraire, de M. Breton le détourne de ce qui se produit autour de lui d’événements mesquins, sinistres ou plats […] ». 強調はバタイユによる）。／「詩はほとんどいつも、所有の巨大な歴史的体系に翻弄されていた。そして、詩が自律的な仕方で発展しうるその限りにおいても、そうした自律性は詩を、世界を完全に詩的なものとして構想する道へと誘うのであり、この道は決まって、何らかの審美的同質性に行き着くのである。それが作用させる異質的な要素は、実践に関しては非現実的である［…］」（Georges Bataille, « La valeur d’usage de D. A. F. de Sade », art. cit., p. 62 : « Elle [la poésie] a presque toujours été à la merci des grands systèmes historiques d’appropriation. Et dans la mesure où elle pourrait se développer d’une façon autonome, cette autonomie l’engagerait dans les voies d’une conception poétique totale du monde, aboutissant obligatoirement à n’importe quelle homogénéité esthétique. L’irréalité pratique des éléments hétérogènes qu’elle met en feu […] »）。